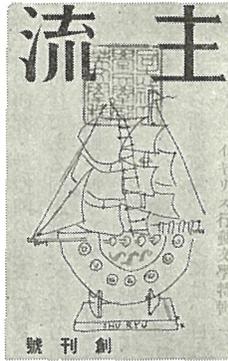


『主流』



「主流」の創刊は昭和十一年（一九三〇）にさかのぼる。当時、アメリカ留学を終えて帰学した上野直蔵（現同志社総長。以下敬称略）は、英文学科の主軸として鋭意その充実を計る。「主流」はその時組織された同志社英文学会の機関誌で、英文学科スタッフ、および卒業

生、在学生の発表活動の中核を形成する刊行物であった。創刊号の編集後記は、「しっかりと伝統と現実生活の上に、正しい批判と実験に武装して、過渡期の文学に方向を与える主流たらんとすること」にこの雑誌の使命を見出そうとしている。

初期の「主流」を通観すると、そこには、いかにも若々しい活気が横溢していてさわやかだ。内容は、舟橋雄、園頼三ら大家の評論、上野直蔵、岡橋祐、高橋源次、兄玉実用、太田藤一郎、木村俊夫などの中堅、少壮の手になる気鋭の論文、さらには在学生の創作、翻訳など、筆者、内容ともに多彩をきわめてい

る。純粹な学術雑誌というよりは、いい意味での文芸雑誌といった色あいが濃く、同志社の英文科にもこんな時代があったのか、と今の私などはある種のうらやましさとあこがれのような想いを禁じえない。第二次大戦へと刻一刻雪崩れ込んでゆく時代の、まさにその大戦前夜の緊迫の中で、文学を志す者たちがみせたしたたかな気概が、「主流」という雑誌自体に豊かなロマンの香りを漂わせて、独特の文学的雰囲気をかもし出している。それだけに、やがて昭和十九年六月、戦争激化のため、第十号をもって刊行中止のやむなきにいたるその挫折は痛ましい。

「主流」の復刊第一号（通巻十一号）は、昭和二十四年（一九四九）八月に刊行された。復刊第一号を飾っているのは、当時同志社の教壇に立っていた矢野峰人のエッセイ「去年の雪」を巻頭に、上野、木村らの論文四篇と創作二篇であるが、編集の「あとがき」に、紙面の制約上割愛せざるをえなかった原稿数篇のあったことが記されていて、このことから、四年間の空白の後に再び甦った文学をする自由とよるこびの中で、それまでうつつ積していた研究欲、創作欲が一挙に沸騰し、この雑誌

に殺到した様子が伺える。以後「主流」は、再び同志社英文学会の学灯の中心として、現在までその輝かしい明りをともし続けていく。

戦後の復刊「主流」の特色は、なによりも年を追って確立されてゆく同志社英文科のアカデミックな学風が、号を重ねるごとに、色濃く誌面ににじみ出るようになることである。英文学科の研究・教授陣の充実と相まって、「主流」の母体である同志社英文学会の山容は、その豊かな裾野を拡げてゆく。特に執筆者には少壮気鋭の研究者が多く、いわば、「主流」は、彼らの学界への登龍門的な役割りを果たし、これら新進気鋭の論文には、日本の英米文学界に大きな反響を呼んだ秀作や問題作が少なくない。また、戦前の「主流」はどちらかと言えば文学主体に偏したきらいがあったが、戦後の「主流」には、文学のみならず、語学系の研究業績も数多く見られるようになる。

一九六〇年代に入ると、研究・執筆陣の層の厚さを物語るかのように、特定のテーマによる特集や、個性的な企画の編集がみられるようになる。二十三号（一九六一）の「ホーン

ン『緋文字』研究特集」、二十五号（一九六四）の「E. M. Forster: A Passage to India 研究特集」、二十六号（一九六四）の「Linguistics 特集」、二十九号（一九六七）の「十九世紀英米小説研究特集」などがそれである。また、二十一、二十三、二十四、二十六号の各号に掲載された「アメリカの大学における講義」と題するアメリカの主要大学の講座内容の紹介シリーズは、戦後間なしの時期に続々と米国内への留学生を送った英文科ならではのユニークな企画で、学生たちに大きな刺激を与えた。

これらを合わせみると、文学、語学を問わず、戦後の英文学科の学問的水準の確立が日を追って高められてゆく様が伺えてまことに頼もしい。だが、半面で、戦前の「主流」にみられた、あの自由で、闊達な、まさしく「文学する」という大らかなよろこびが影をひそめていったのも事実で、その点いささか寂しい気もする。「主流」は、研究論文のみではなく、創作や翻訳に今も門戸を開いているはずだ。戦後の「主流」には、ごく僅かな例を除いて、そういった創作活動の航跡をほとんど見ることは出来なくなった。今の学生にそ

の面での意欲が欠けるのだろうか、それともそのような動きを近づけない何か、「主流」という雑誌そのものの中に出来上ってしまったのだらうか。いずれにしても、私には少なからず寂しくもの足りない思いがつきまとう。

ところで、「主流」最新号（別冊・一九七五年九月十六日発行）は、ちょうど一年前死去された故ロバート・H・グラント教授をしのぶ追悼号として特集されている。戦後の英文科に学んだ者の多くは、あのトレード・マークの髭と、にこやかな童顔と、そして独特のイントネーションで語られるグラント教授の英語を忘れない。教授は、一九四七年アメリカン・ボード派遣の宣教師として来日、以来二十数年余り英文科の教壇に立ち、戦後の英文科再建の一つの柱として、多くの人材を育ててきた。この追悼号を繕くと、そうしたグラント教授への追慕の想いと、教授の薫陶を得た気鋭の学者たちの研究意欲が随所に満ちていて、最近の英文科の豊かな人脈の一端を垣間見る感がする。

内容は、巻頭に総長上野直蔵の「弔辞」を置き、続いて追憶の記、論文、そして最後に

グラント教授の略歴と業績一覽を添えてしめくくっている。追憶の記は、住谷悦治、谷口敏郎、太田幹雄、高山修、根本加寿子、A・E・マッシュューズ、E・L・ヒバード、フィリップ・ウィリアムズの諸氏から寄せられた、いずれも生前の教授の業績と面影を私達の前よみかえに甦らせてくれる好エッセイである。残りはすべて教授に捧げる論文で埋められ、総数十七篇にのぼる。執筆者は、福田京一、松山信直、那須頼雅、岩山太次郎、近田小一、フィリップ・ウィリアムズ、村田辰夫、B・D・タッカー、楠木美和子、明石紀雄、小宮山博、北垣宗治、貞方敏郎、渥美正平、吉岡健一、石黒昭博、岡田妙の諸氏で、いずれも教授にゆかりの弟子と友人である。論文は大別すると、アメリカ文学関係十篇、イギリス文学関係二篇、英語学および教授法に関するもの五篇となっている。個々の論文の紹介は紙面の余裕もないから差し控えるが、總体的にみて執筆者のほとんどが中堅と若手の研究者で、就中、アメリカ文学関係がその約半数を占めている。このことは、同志社英文科の、戦前よりとり組んできたアメリカ文学研究の古い伝統と実績が、いま大きく華を開きつつある

ことを如実に物語っている。二篇のイギリス文学関係の手堅い実証的研究、実際に則し、しかも体系的に論じられた語学関係の諸論文と共に、日頃の「主流」に登場する役者達がいかに多彩で力量豊かであるかを、この追憶論文集はその雛型のように、よく示している。それだけになおさら、先にもふれたように、これらの豊かな人材のもとで、この「主流」が、文学や語学の研究のみならず、すぐれた創作の才能の登場をも促す足場となることが一層望ましく思われて仕方がない。その時、雑誌「主流」は、本当の意味での英文科に連なるすべての者の「主流」となるのではあるまいか。

なお、この「グラント教授追悼号」を希望の方は、同志社大学英文学会（英文学科研究室内）に申し込まれたい。

（女子大学教授・石田 章）

* * *

同志社時報 第56号

座談会 新島精神と同志社……萩原 俊彦・久永 省一・北垣 宗治・駕淵 紹子
都間 和子・上田堅一郎・（司会）井上 勝也
宣教師の足跡……………竹中 正夫
同志社とファシズム……………具島兼三郎
戦時中の同志社を顧みて……………有賀鉄太郎

学園紹介・えと文・その他

1部150円・年3回発行